

# 近自然セミナー(2008/09/07~2008/09/17)に参加して



研究第一部 部長 児玉好史

## 1. はじめに

スイス近自然学研究所の山脇正俊氏が、「近自然セミナー in スイス・ドイツ」を開催しました。このセミナーに参加し、近自然の川づくり、道づくり、まちづくりについて、視察・研修してきたことを報告します。

参加者は、山脇氏を含め、総勢30名、団長は、岡村俊邦氏(北海道工業大学教授)です。

## 2. 主な視察内容(2008/09/07~2008/09/17)

- ・ドナウ川水系イザール川(ミュンヘン市、ミッテンヴァールド町、ガルミッシュパルテンキルヒェン市)、ロイサッハ川、ドナウ川水系クランツバッハ川(クリューエン村)
- ・ライン川水系ライン川、ボーデン湖、グライフェン湖、ネフバッハ川、ライン川水系クレーブスバッハ川、トゥール川、リマント川
- ・ミュンヘン、ミューレン、インターラーケン、チューリッヒ(小川開放計画、チューリッヒ州立大学)、ヘッドリンゲン村(旧道撤去)

## 3. 視察の所見

実質、9日間という視察期間だったため、興味深いことは非常に多かったのですが、ここでは紙面の都合上、いくつかの事項に絞って報告します。

### 3. 1 人々と川との距離

日本から到着したばかりのホテルから、ミュンヘン市内に出かけたところ、レキ河原が残るイザール川が目の前に現れました。平日の夕方、家族、友人で日光浴や散策を楽しむ人たちがあちこちにいます(図-1)。イザール川は市街地の中心部を流れており、河畔から数ブロック内には都心が広がっています。景観の保全のための様々な制度が整えられており、建物の色調が統一され、スカイラインに一体性があります(図-2)。

日本に例えると、東京の日本橋川で人々が水浴びをしているようなものです。人々と川との距離の近さ、町並みの美しさに感嘆しつつ、セミナーが始まりました。

### 3. 2 人々の認識

近自然という言葉そのものが人口に膾炙しているかどうかは別として、近自然の考え方は専門家だけ

でなく広く人々の間に浸透しているとのことです。その結果が現場に現れています。例えば、河川改修における近自然工法の採用(図-3)、エコロードや路面の汚水処理施設の設置、信号からロータリーへの転換、自転車と歩行者の分離による自転車交通の重視などの具体的な取り組みに至っています。



図-1 ミュンヘン市内のイザール川、日光浴を楽しむ市民



図-2 ミュンヘン市都心、色調、スカイラインに一体性



図-3 コンクリートの落差工をいくつか分割して、一基あたりの落差を小さくし、巨石を用いた自然な落差工としている「ランプ工」

先進的な考え方を持つ専門家や一部の住民だけが理解している状況ではこのような具体的な取り組みには至らないと考えられます。突き詰めれば、住んでいる私たちの一人一人の生き方、生きる目的、幸せ観と、その地域の河川、道路、街並みなどがどのようにつくられるかとは、密接に関係しています。

### 3. 3 技術情報

日本では、多自然川づくりに関する最低限の情報について、ポイントブック等の形式で整備しているようにしています。一方、当地では技術基準、マニュアル等はなく、それぞれの河川の状況に応じて各河川を担当するエンジニアが個別に検討するとのことでした。ただし、技術情報は組織の内部で集約され、エンジニアの間では共有されます。現地で示された図面(図-4)は簡単なものでしたが、模型実験、水理計算を行った上で、作成しているとのことであり、これらの資料にはドイツ内の政府のエンジニアがアクセス可能です。

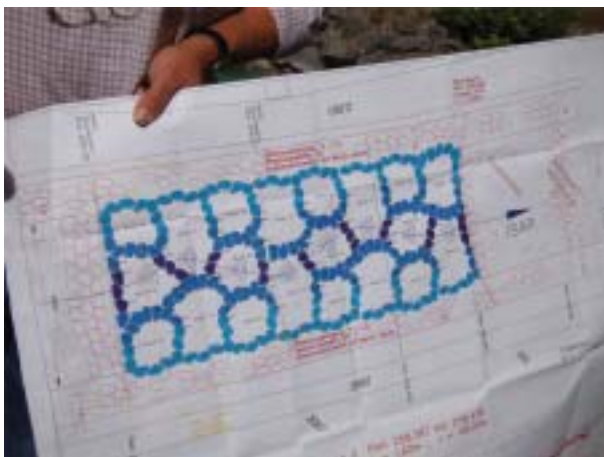


図-4 「ランプ工」の平面図(ランプ間は、いくつかのプールに分割されている。平面的には、アーチ構造としている)

共有される情報がどの程度までのものか、疑問は残るが、全ての技術情報に全てのエンジニアがアクセスできるとすれば、確かに技術基準等の必要性は薄くなります。

最近の行政の進め方のキーワードに「情報公開」があります。この言葉には、技術情報を当然含んでいるはずであるが、組織の内部ですら十分とはいえません。組織内の技術の情報公開、共有を進めていくことは重要だと考えます。

### 3. 4 魚道

視察した河川には、多数の堰などの横断工作物がありました。多くの施設に魚道が設置されており、日本でおなじみのプール式の魚道も多数あります。どうも機能していないような施設もありますが、驚くようなものもあります。図-5は、黙って現地で見せられても(あるいは、写真を見せられても)、魚道とはわかりません。いわゆる、緩勾配水路式と呼ばれる魚道で、日本でもいくつかあります。この施設の周辺には空間の余裕があるので、このような整備が可能と考えられますが、魚道といえどもここまでできる、と感心しました。



図-5 一見すると魚道とわからない緩勾配水路式の魚道

### 4. おわりに

最終日の現地での夕食会で参加者全員からスピーチがありました。私のスピーチの概要を記します。

「今回のセミナーに参加して、よかったこと、うれしかったことを、三点申し上げる。

一点目は、百聞は一見に如かず。近自然の河川は、現場で見るとよりすばらしかった。

技術者のライトバウアーさんやゲルディさんたちも同じ。

二点目は、食事がおいしかったこと。今日の食事も含めて。日本に帰った後、体重計に乗るのがとても怖い。

三点目は、この場にいる皆さんと知り合い、友達に慣れたこと。こんなにたくさんの方が、日本の川をよくしようという気持ちを持っている。とても心強い。これから一緒によくしていきたい」